

西部大開発と

文化的ジェノサイド



楊 海英

わが美しき故郷を漢人の犁が破壊し
わが馬の群れと家畜たちは草原から消え去った
わが身が白骨と化して沙に埋もれたときに
漢人の犁を壊す存在となろう

——モンゴルの民謡 [Sirajiansu 2006: 4]

「西部大開発」を中国の漢人たちはアメリカ合衆国の往時のゴールドラッシュになぞらえてロマンチックに語る。豊かさを夢み、国家の繁栄を希求する民ならではの愛国心のあらわれであろう。そうしたなか、建国以来ずっと解決の見通しがたかないチベット人とウイグル人、それにモンゴル人側からの政治的な抵抗を民族問題としてとらえる漢人たちは、「西部大開発」でいわゆる地域間格差と民族間

格差を是正しようと模索している。豊かになれば、「野蛮人」たちも固有の宗教文化と伝統的な遊牧経済を放棄して、民族問題の武器をも捨てて中華の天蓋に帰順するにちがいない、と漢人たちは思いえがいている。開発と発展は、はたして民族問題を根本から解決する良薬となりうるのだろうか。というのも、開発される側、すなわち西部に居住する少数民族の人たちは逆にいままで以上に同化される危険性を危惧しているからである。

中国の民族学者たちは政府がすすめる西部大開発にいまどのように協力しているのだろうか。彼らがうちだした理論の究極的な目的はどこにあるのだろうか。本稿では近年の中国で大きな議論を引き起こしてきた代表的な「民族学的な理論」とそれらへの少数民族側からの反響を紹介し、

西部大開発と連動する理論界の動向に注目したい。そして、西部に含まれる住民の一員であるモンゴルの知識人たちが開発と民族問題の関係をいかに認識しているかを分析する。政府側の民族学者たちと少数民族サイドの研究者たちのあいだでおこなわれている対話の状況を整理しておきたい。

一 静かな翻訳改変と「脱政治化」

およそ一九九〇年ごろから、共産主義思想の桎梏から少し解放されて、学会に復帰したばかりの中国の民族学者たちと民族理論の制定者たちはなんら表立った説明もせず、民族ということばの英語訳を、静かにしかし着実に変えはじめた。政権獲得以来長く民族を nation と理解し、*China Daily* をはじめとする政府系の英字誌(紙)もそれを守ってきたが、突如として ethnic group (族群) を愛用するようになった。Mongol nation や Tibetan nation という表現は消え、代わりに ethnic Mongol と ethnic Tibetan がにぎやかに登場した [Naran Bilik 2007: 30]。中国以外にもモンゴル国という国家を有し、かの地に住むモンゴル人たちを同胞だと認識する私たち内モンゴル自治区のモンゴル人たちは民族自決権を擁する nation の地位から漢人が支配する国家の二等市民、あるいは奴隷たる ethnic Mongol に墮

ちたのである。

そもそも中国の民族学者たちは「族群」という概念を最初は忌み嫌っていた。というのは、漢語圏で最初に ethnic group を族群と置き換えて用いたのは「台湾の反動派」たちであるからだ。「一九七〇年代以降は台湾独立勢力に愛用された政治的な概念」だと認識し [郝時遠 2004: 123-136]、共産中国への上陸を強く警戒していた。台湾問題を「国家の核心的利益」とみる中国において、民族ということばの翻訳上の改変は決して語彙の面での小細工ではない。中国の学者たちが族群を愛用するようになったのは、「台湾独立勢力の主張」を容認したのではない。nation を ethnic group に改変しないかぎり、もつと深刻な国家分裂の危機をもたらすかもしれないという責任感から奔走した民族学者がいたからだ。アメリカに留学し、ethnicity について学んだ馬戎である。nation はひとつだけ、「中華民族」を指すときにのみ the Chinese nation として用い、五五の少数「民族」をあらわすときには ethnic minorities をつかうべきだ、と馬戎はよびかけた。彼は自らの根拠を三つ提示した [馬戎 2004: 123]。

第一に、「中国の少数民族」は社会的にも文化的にもアメリカにおける「少数種族、族群」(racial and ethnic minorities) と同じで、ethnic group に変えたほうが「わが国の民族の構成の実情」に合致する。第二

に、「中華民族」という上位概念とそれに属する下位の諸民族が同じ「民族」ということばをつかうことで生じる無駄な混乱を避けなければならない。第三に、英語の *nationality* や *nationalism* を用いれば、「国外の読者」たちはこうした表現に付随する「民族の自決権」を連想し、ネイション・ステートの建設といった分裂主義運動に加わる危険性がある。

孫文を支持して清朝を倒そうとする志士や、あるいは満蒙独立を実現させようとする「満洲馬賊」のような「国外の読者」は今日の日本にはたして何人いるのだろうか。「国外の読者」の存在を杞憂するのはパフォーマンスで、「国内の少数民族の読者」たちの動向を事前に封殺しようとするのが愛国者馬戎の真意であろう。馬戎はさらに共産党と中央政府に提案する。ethnic group はあくまでも一定の文化と歴史を受けつぐ団体で、固有の領土と結びつく nation 〓 民族ほど危険ではない、と忠言を呈している[同 123]。国家分裂の危険性を帯びたことばの翻訳的改変を、馬戎は「少数民族群の問題を解決する際の脱政治化 (de-politicization)」と呼んでくる[同 123]。

馬戎はまた「歴史」を振り返りながら自説を補強する。漢文の記録を証拠とすれば、華夏〓漢人は蛮夷狄戎よりも「発展が早く」、「文明の水準も高い」という。だからこそ、漢人は夷狄の「文明化〓華夏化」に熱心で、夷狄側も

積極的に華夏文明を学習した[同 124]。

かく主張する馬戎の目的は単純明快である。「発展が遅く、文明度の低い」蛮夷狄戎が華夏文明を学ぶ「文明化」のプロセスはまさに「発展」である。今日においても、「先進的な漢人」が「立ち遅れた少数民族群」を「助け」、彼らの故郷「辺境」を「開発」するのも絶対的な善良な行爲だとしている。しかし、モンゴルの知識人は馬戎説の性質を、「少数民族群の問題」における民族自決の原理を去勢するのにもたらされた「政治化の言説」だと理解している[郝維民 2005: 410]。自らを「長い歴史を有する国」とみなす中国は「古くから」や「固有の」といった形容詞を愛用する。中国は「古くから多民族国家」だと夢想する知識人[王 2005]も所詮は現在の独裁政権による少数民族支配を側面から援護しているにすぎない。

二 ジョイント・ナニー

——もはや有名無実の「自治」も不要——

馬戎の説を支持し、呼応したのは中国社会科学院の朱倫である。彼は自治 (autonomy) よりも共治 (jointnomy) こそ、中国をはじめ、現代世界における民族間関係を処理する有効な実践で[朱 2002: 1-9]、「民族政治理論の新思考」だと主張している[朱 2003: 1-18]。

朱倫はいう。そもそも中国の民族区域自治は「民族固有の領土」を単位とするものではないし、「単独の民族社会」を基本とするものでもなく、集中居住する区域における自治だとしている〔朱 2002: 3〕。朱の強引な立論は頭から一九四九年以前のチベットや東トルキスタン（新疆）、それに内モンゴルの実情を否定している。つまり、歴史的にこれらの地域はそれぞれチベット人やトルコ系の人々、それにモンゴル人たちの領土で、漢人以外の住民たちが中華とまったく無関係の歴史と文明を創造し、異なる歴史観をいだいてきた事実を根底から否認している。朱の目的は明確だ。「自治だけが現代の多民族国家における政治生活のすべてではない。共治こそ重要だ」。「自治はその自治をおこなう自治者自らを政治的に周縁化させる可能性があるし、分裂主義を助長する危険性すら有している」と危惧している〔朱 2002: 4〕。要するに、中国政府が心配する「分裂主義」をくいとめるのに、いままでに実施してきた有名無実な区域自治を中止して、漢人との共治、換言すれば実質上は漢人統治の強化を提案した政策論である。

朱倫は共治をすすめる必然性を三つ挙げています。

まず、「民族分裂主義」は主権国家に反対されており、国際社会の承認を得にくく、多民族がひとつの国家を構成している以上、共治でなければなりません。次に、現代社会は「公民の自由な移動」をみとめており、民族区域自治区

も漢人の流入でもはや単一民族のものではなくなっている。最後に、民族問題は異なる民族集団間に生じること、共治でなければ解決できない〔朱 2002: 45〕。朱は別稿で旧ソビエト連邦や旧ユーゴスラビア連邦の「失敗した民族自決の理論と政策」を傍証にして、「成功した中国の区域自治政策」を一層強化する道は共治でしかない、という〔朱 2003: 1-18〕。

国際社会が旧ソ連や旧ユーゴスラビア連邦から分裂した諸国家を承認しない、との朱倫の発言は、馬戎がいうところの「国外の読者」云々と同じように、実際は「国内の読者」たる少数民族を欺くためである。また、朱が主張するところの「公民の自由な移動」も農村戸籍と都市戸籍を厳格に定める中国の法律と抵触する空論でしかない。ただ、ことに少数民族地域に対しては、一九四九年からずっと漢人の殖民と屯田を推進してきた中国の政策を指すならば、それなりに正鵠を射た説とも評価できよう。しかし、他民族との関係で生起する民族問題の解決策として共治をもたらずのは、多数者側からの傲慢な態度だとしかいいようがない。

三 名存実亡者側からの反論

馬戎と朱倫が政客よりも過激な言説を学術という名の

とで世に公開して以来、少数民族側から強烈な反論があいついで湧き起こった。

内モンゴル大学の歴史学者郝維民（モンゴル名・オドンビリック）は「西部大開発とモンゴル族の発展——いわゆる〈少数民族群の脱政治化〉と〈民族の共治〉を評す」という長大な論文を書き、逐一、馬戎と朱倫らの立論に反撃をくわえた「郝維民 2005: 384-420」。

郝維民はまず、モンゴル族は現代中国という一国家の枠組みにのみおさまる民族ではなく、「世界史を創造した人々」だと位置付けている。中国が誇りとする巨大な版図もモンゴル人の大元帝国がその基礎を固めたものである。そのようなモンゴル族を単なる「文化的な族群」とする馬戎の観点は「マルクス主義における民族問題の最高原則、すなわち民族間平等の原則に反するものだ」と批判している「同 384-385, 411」。民族区域自治の制度と民族政策の存在を「民族問題」に置き換えてその「脱政治化」をうながすのは、少数民族の生来の自治権を剥奪しようとする政治的な行為で、一九六〇年代の文化大革命中に横行した極左思想と本質的に同じである、と論破する「同 410」。

では、郝維民が指摘する極左思想が横行していた時代に、モンゴル人の暮らす中国の内モンゴル自治区で何が起こったのだろうか。まず、一九五七年から始まった「反右派闘争」の形で展開された「大漢族主義と地方民族主義の

双方に反対する運動」のなかで、実際に肅清されたのはモンゴル人ばかりで、毛沢東がいうところの「大漢族主義者」は一人だに批判されなかった、と郝維民は論じている「同 394-395」。郝維民の主張に沿って付け加えるならば、中華人民共和国の建国以降に無数の「少数民族分裂主義者」が逮捕、処刑されてきたが、大漢族主義者が裁かれたという事実を私は知らない。

郝維民はさらに述べる。モンゴル人の指導者で、自治区の最高責任者のウランフーは漢人が最高の文明とする農耕よりも自然環境と社会の実態に合致した牧畜業を優先する政策をすすめたことで、「民族分裂主義」のレッテルを貼られ、文化大革命開始前に失脚させられた。そして、内モンゴルには「ウランフーをボスとする大規模な民族分裂主義者集団とその社会的な基盤が存在する」と断罪された。さらに中国共産党は、一九四〇年代に民族の自決を決定した内モンゴル人民革命党を「祖国の分裂を図った反革命集団」だと認定し、「建国後も地下に潜伏して分裂活動をつづけてきた」とみて、文化大革命期に大量虐殺が断行された。人口わずか一五〇万人のモンゴル族を対象に、三四万六千人が逮捕され、一万六千人が殺害され、一二万人に障害が残された。そして、一九六九年には自治区東部のホルンボイル盟とジェリム盟、それにジョーウダ盟が、それぞれ黒龍江省と吉林省、および遼寧省に分割された。さ

らに西部のエチナ旗とアラシャン右旗を甘肅省に、アラシャン左旗を寧夏回族自治区に与えて、「分けて統治する」政策が導入され、モンゴル族の自治区は名存実亡した【同399-400】。実際、漢人たちは当時の内モンゴル自治区の名を変えて「中国共産党反修省」と呼んでいた【特古斯1993:53】。「修」とは「修正主義のモンゴル人民共和国」を指す。このようにモンゴル人同士を離間させて侮っていたのである。

モンゴル人たちが中国でいかなる「自治」を経験してきたかについて、ウラーンフーという指導者の浮沈を通してみてみよう、と郝維民は述べている。少数民族出身者が自治区政府機関においてどれほどのポストを占めるかは、真の意味での主人であるか否かをチェックする基準のひとつだった。一九六六年八月までの内モンゴル自治区におけるモンゴル人と漢人との比率は一・七だったが、自治区政府内のモンゴル人主席と副主席の割合は五〇％に達していた。何よりも自治区の党委員会書記もモンゴル人のウラーンフーで、彼はまた内モンゴル自治区政府主席と内モンゴル軍区司令官兼政治委員の要職をかねていた。ウラーンフーは名実ともに中国における民族区域自治のシンボルだったのである【郝維民2005:402-403】。

しかし、ウラーンフーは中央政府がすすめる草原開墾や民族融合といった大漢族主義的な政策に抵抗したために失

脚に追い込まれた。それ以来、自治区の実権を握る党書記のポストはずっと漢人に握られてきた。郝維民はまた自らの経験を紹介している。近年あるモンゴル族自治県を訪問した際に、自治法の実施状況について尋ねると、モンゴル人を県長（書記ではない）に任命するくらいで、ほかに特に配慮しない、と漢人幹部たちは躊躇せずに応じたという。また、西部大開発にともない、モンゴル人たちが自分の故郷でどのような利益を享受しているのか、との問いに對しても、「事実上何もない」と漢人たちが素直に返事したという【同403,414】。

「中華民族は民族学の概念ではなく、特殊な歴史的条件のもとで生まれた中国の各民族に對する総称にすぎない」。少数民族に對して「中華民族意識」を強化するような性急な民族融合政策は受け入れられない、と郝維民は結論している【同420】。郝維民は自他ともにみとめる「愛国主義者にして社会主義歴史学者」であるが、その彼からの反論に馬戎と朱倫らがいかに自衛したかは、私は把握していない。

四 農耕化とジェノサイドの発動は「民族問題」を解消す

文化大革命直前に内モンゴル自治区に生まれ、郝維民らが指摘する政府と漢人たちによるモンゴル人の大量虐殺を

幸運にも少年期に目撃した私も西部大開発の進行に注目せざるを得ない。

日本の殖民地だった内モンゴルのモンゴル人たちは一五四五年秋に独立しないしは同胞たちの国、モンゴル人民共和国との統一を切望していた。モンゴル人民共和国の指導者たちも内モンゴルの同胞たちを「日本と漢人の殖民地支配から解放しよう」と決心していた【楊2009a:13-14;2010:520-523】。しかし、大国同士で勝手に交わした「ヤルタ協定」は弱小民族のモンゴル人たちの声に耳を傾けなかった。その結果、モンゴル人の故郷の一部が漢人たちの国家に編入されたのである。

中国の漢人たちは内モンゴルを一九四九年に「解放」したと高らかに宣言しているが、誰の、どんな圧政と搾取からモンゴル人たちに新たな「自由」と「発展」を与えたのだろうか。モンゴル人たちが口をそろえて証言しているのは政治的な抑圧と経済的な破壊でしかないという事実は、漢人たちの主張とは正面からぶつかりあっている。例えば、内モンゴル自治区の有名なジャーナリストであるシャラブジャムツは政府から発行禁止を命じられた「犁の下の内モンゴル」(*Arjusun Qosighun Douraki Üür Mongol*)という論文のなかで次のように主張している【Sratjansu 2006:1-62】。内モンゴルを自国に併合した中国は「掺沙子」(沙を混ぜる)と称して、漢人殖民を組織的にすすめてきた。一九

四九年に五百万人いた漢人はいまや三千万人に達し、「主体」とされるモンゴル人の七倍となった。漢人たちはどこに移り住もうと、現地の自然環境に一切構わず犁を入れて種子を播き、収穫してはじめてその地を占領したと実感する。その結果、沙漠化がいたるところで弊害をもたらしていることは世界的にも知られるようになった。政府もみとめる事実だが、一九八九年の時点で、ウーランハダこと赤峰市の草原の八三・八四%、オールドス市こと旧イェジョー盟の草原の七三・八五%が劣化し、黄色い砂地と化した【ibid.10-11,16】。

「解放」後の中国は前後五回にわたって、大規模な草原開墾を実施して、環境を破壊した【ibid.36-37】。

第一回：一九五八～一九五九年に「食糧生産を綱要とする運動」期

第二回：一九六〇～一九六二年の公有化政策の強化時期

第三回：一九六六～一九七六年の文化大革命期

第四回：一九七六～一九八〇年の農業大寨に学ぶ時期

第五回：一九八〇年～現在までの「草原の開発利用」政策期

五回にわたる大規模な草原開墾にともない、一九五〇年代の大躍進期から文化大革命までのあいだに約一千万人も漢人農民が侵入してきた。この間の開墾面積の正確なデータを政府は秘匿して公開しないが、過去二千年のあい

だの累積よりも多いのは事実である。それはまぎれもなく「開発」と称した略奪であり、内モンゴルを殖民地としかみていない政策のあらわれである、とシャラブジャムソは指摘している [Ibid. 10-18]。

そもそもモンゴル人と漢人は歴史が始まって以来ずっと対立し、異なる文明を営んできた、とモンゴルの知識人たちは理解している。まったく異なる文明をもつ人々を脅威とみなして、中国に同化させるために軽牧重農の政策が「解放」後に強制されてきたのである。それはまず、モンゴル人の経済的基盤を壊滅させてから文化と政治の面での同質化をはかる戦略にもとづくものであった。しかし、ただ単に経済の面から遊牧文明を改造するには時間がかかりすぎるし、ときには大胆な、効率のよい同化政策を推しすすめる必要があるとみた漢人たちは、大量虐殺すなわちジェノサイドを発動したのである [Ibid. 11, 32]。

モンゴルの知識人たちは例外なく文化大革命中のジェノサイドを清朝末期に発生した「金丹道による大量虐殺事件」と結びつけて考える [阿拉騰徳力海 1999、アルタンデレヘイ 2008、Strabjansu 2006; 楊 2009a, 2009b]。一八九一年旧暦一〇月一〇日から一月二七日までに、紅い帽子をかぶった漢人たちはジョーウダ盟とジョソト盟、それにジェリム盟に乱入し、「平清掃胡」すなわち「清朝を倒して、モンゴル人を一掃する」、「モンゴル人に逢えば、訳を

きかずに殺せ」というスローガンを掲げて各地で虐殺をはたらいた [ボルジギン 2003: 188-189]。モンゴル人の犠牲者は三〇万人に達し、「殺人奪地」、つまり「モンゴル人を殺して草原を奪う」ところ漢人の目的はみごとに達成された [Strabjansu 2006: 43]。中国はいまでも「金丹道」を「農民起義」だと高く評価し、「満洲清朝の官吏とモンゴル人の封建的な王公に打撃を与えた」と政府が発行する『初級中学課本試用本——内蒙古歴史』は教えている [1988: 176-177]。当時の内モンゴル東部に三〇万人もの「封建的な王公」が存在していたのだろうか。

文化大革命中にも同様な歴史が再現された。三〇万人ものモンゴル人が殺害され、広大な草原に殺人者の漢人たちが住みついた [Strabjansu 2006: 44]。シャラブジャムソが挙げる犠牲者の数は政府が公開したデータと食い違っているが、モンゴル人たちの支持を得ていることを付け加えておきたい。漢人の指導者たちは「モンゴル人を殺すのは怖くない。一人を殺せばりつばな男で、十人殺せたら英雄だ」と奨励していた [楊 2009c: 24]。シリーンゴル盟に駐屯する解放軍の司令官趙徳榮は「おれはモンゴル人を見ただけで気分が悪くなる。シリーンゴル盟の全モンゴル人をえぐり出して肅清しても、全国から見ればごくわずかだ」と発言していた。別の解放軍幹部も「モンゴル人たちが全員死んでも大した問題はない。我が国の南方にはたくさん人間

がある。モンゴル人たちの生皮を剥ぐ」と話して虐殺を推進した「アルタンデレヘイ 2008: 19-21」。

モンゴルの知識人たちは百年のあいだに二度にわたって発生した大量虐殺事件を冷静に分析している。二つの事件の異同を以下のように挙げています。まず、二つのジェノサイドに共通する側面とは次の通りである [Sirajamsu 2006: 44-49]。

- (1) いずれも集中的組織的にモンゴル人を殺害して草原を占領するための集団的な暴力である。金丹道は白蓮教という邪教を信じ、文化大革命中の漢人たちは「革命」や「社会主義」という新宗教を狂信した。
- (2) 民族文化を根底から破壊した。一例を挙げると、金丹道は著名な作家で、一八七一年にチンギス・ハーンの伝記を小説風に書きあげたインジャーナシの無数の蔵書を焚したことも悪名高い。中国共産党がモンゴル人たちのあらゆる文化財を「四旧」として破壊した事実は広く知られている。
- (3) 略奪と侮辱の性質が同じである。金丹道はモンゴル人の天幕に入っては女性たちを凌辱した。文化大革命中も「人民の子弟」と自称する「人民解放軍」の兵士たちがモンゴル人の女性たちをその家族の前でレイプした事例が数多く報告されている。略奪も枚挙にいとまがない。例えば、一九六九年にシリーンゴル盟のス

ニト左旗バヤンウーラという牧場から一度に八〇八八頭ものウマを略奪した（ウマはモンゴル人にとってもっとも神聖な財産である＝引用者）。

- (4) 虐殺の善後処理をおこなわなかった点も同様である。金丹道の場合、モンゴル人の被害者たちが朝廷に上奏しようとしても、漢人官吏たちに無視された。文化大革命のとき、虐殺を指揮した漢人高官らと実際に殺戮に加わった漢人たちも例外なく他の省へ栄転していった。

- (5) 漢人たちの組織的かつ大規模な殺戮に対し、モンゴル人は終始無防備で、「羊のように無抵抗」だった。暴力をはたらけばモンゴル人はいいなりになるとのイメージが定着し、いつまた大量殺戮に巻き込まれるかもしれないという危険性を生んだ。

二つのジェノサイドにはまた異なる点もみとめられよう [Sirajamsu 2006: 49-56]。

- (1) 発生した時代が違う。金丹道による殺戮は封建社会の皇帝を頂点とする専制的な支配の下で起こったことである。一方、文化大革命期の虐殺は二〇世紀の共産党が断行したものである。いわば、共産党自身が主張するところの「野蛮」と「文明」の時期にそれぞれ展開された、漢人たちによる少数民族の殺害行為である。
- (2) 方針が異なる。金丹道は「モンゴル人に逢えば有無

をいわずに殺せ」と無差別な暴力を繰り返したのに対し、文化大革命期の漢人たちは専らモンゴルの知識人や各界の有力な指導者らエリート層をターゲットにした。文化大革命を経て、モンゴル人たちは民族の精鋭集団を完全に失った。

(3) 規模が違う。金丹道は内モンゴルの東部を襲ったのに対し、文化大革命期の殺戮は中国全土に住むモンゴル人社会に及んだ。国家による組織的な殺戮の発動にモンゴル人たちに逃げる余地はまったく残されていなかった。

シヤラブジャムソは最後に強調する。中国は旧日本軍が南京を占領した際に市民側に三〇万人の犠牲者が出たと主張する。百歩譲って仮にその数字がひとつの見解だとしても、四億人の漢人全体に占める割合は〇・七五%にすぎない。これに対し、金丹道と文化大革命は実にモンゴル人口の一五%の命を奪ったのである。この割合からそれぞれの民族に与えた打撃の大きさが理解できよう。

四〇年前の文化大革命中に空前絶後の虐殺を経験したモンゴル人たちはいまでも「心が殺された」、「魂胆が殺された」と表現する。それは、中国が内モンゴル自治区でいかなる圧政を敷いても、もはや抵抗できる人物が完全にいなくなった現実を意味している。その結果、今日のチベットや新疆の住民たちのように果敢に立ち上がることができなく

なったのである〔楊 2009a: 220〕。そういう意味で、農耕化とジェノサイドの発動は民族問題を解消するのに有効だった、と中国政府と漢人たちの営為を評価してもよからう。

五 環境保護という大義名分が 草原を破壊す

政府と漢人が主導する虐殺は一九六七年からスタートし、一九七〇年に少しずつ鎮静化した、と中国の政府系研究者たちはいう。しかし実際は、都市部から離れた草原の奥地では文化大革命が完全に終息する一九七六年まで死者が続出していたのを私たちモンゴル人は目撃し、また経験してきた〔楊 2009a: 71-78〕。

繰り返すように、一五〇万人前後のモンゴル人社会から三四万人が逮捕されるという数字は、平均してひとつの家庭から少なくとも一人が「反革命分子」か「民族分裂主義者」として連行されたという事実をあらわしている。我が家の場合は父親が逮捕を恐れて逃亡し、高齢の祖母は漢人たちが主催する批判闘争大会で毎日のようにつるしあげられ、労働改造を受けていた。母と私は家から追いだされて掘立小屋に住み、一時は家畜の放牧権も剥奪され、生きるすべもなく生きていた〔同 57-71〕。

そうしたなか、一九七〇年五月から政府と漢人たちは我

写真1 草原をブルドーザーで切り開く地質調査隊
(1991年7月筆者撮影)



写真2 地質調査隊員(前列)と彼らの草原開墾を阻止しようとするモンゴル人たち (1991年7月筆者撮影)

が家の周辺の草原に犁を入れ開墾を始めた。「立ち遅れた放牧ではなく、文明人の生活を導入」するためだった【同2】。草原の脆弱な生態を把握していた自治区の最高指導者のウランフーは、建国後もずっと中央政府が推進する開墾に抵抗しつづけた。その結果、彼は文化大革命開始直前に打倒された。もっとも、農耕化に反対するウランフーに目を付けて粛清しようとする政府の周到な準備は遅くとも一九六四年から推進されていたという事実には、モンゴル人たちは文化大革命が終わってから気がつく【同1、35】。我が家周辺の草原開墾もそうした文明間の衝突という背景の下でおこなわれたものである。「文明人≡漢人」の生活が導入された最初の年は収穫があったが、二年目には播いた種子の分も回収できなくなり、三年目からあたり一面に黄色い沙漠が広がるようになった。こうした激変をオルドスに下放されていた南京からの漢人知識青年たちも目撃していた【志1993:309】。

沙漠には四、五年後に家畜が食べられない毒草がちらほらと生い茂るようになる。二〇年後の一九九〇年代に入っ
てようやく普通の牧草が少しずつ回復してきたが、地形は
すでに平らな草原から凸凹の激しい丘陵に変わっていた。
貧弱な植皮の一寸下は沙漠だ。いつでも沙丘と化す環境が
整ったのである。

かろうじて部分的に緑が戻った草原に一九九一年から地

写真3 オルドス高原西部にある筆者の草原にそそり立つガス開発機器 (2008年9月筆者撮影)



写真4 内モンゴル自治区中央ケシクテン草原における開発の風景 (2009年8月筆者撮影)

質調査隊が出没するようになった(写真1、2)。彼らは草原を幅約四メートルの帯状に切り開き、五〇メートル間隔でダイナマイトを地下に埋め込んで爆発させる。その地震波で地下資源の有無を探知する。その結果、一九九〇年代末期からオルドス高原には世界有数の地下天然ガスの存在が確認され、開発が始まった。北京オリンピックが開催された二〇〇八年の秋にはついに我が家の草原にもガス田があると判明し、削掘の機械が建てられた(写真3)。一二月、家畜をすべて売り払い、先祖代々放牧してきた草原から町への移住を余儀なくされた。

ガス田の開発(写真4)がなくても、モンゴル人たちはいまや町への集中移住を命じられている。それは、中国北部の自然環境が悪化し、砂嵐が漢人の都北京を飛び越えて日本や北米にも飛来するようになったのは、モンゴル人たちによる「過放牧」が原因だと政府が認識しているからである。オルドスではすでに一戸につきわずか二百頭くらいしかないが(この頭数では普通の生活は到底まかなえない)、家畜を一年中柵のなかに入れて飼育するよう命令され、草原で放牧してはいけないという政策が敷かれている。「大地に落ちた草の種子を家畜の蹄が踏んで地中に入れてやらないと次の春に新しい草は芽生えない」、「ある程度育った草を家畜が刈って食べないと高く生長しない」といったモンゴル人の知恵を漢人たちは無視している。家畜

の放牧は草原の劣化を防止し、沙漠化は漢人農民がもたらした結果だということを文明人の政府は絶対にみとめようとしな。

砂嵐の原因を作ったとされるモンゴル人たちを町に収容した直後から、家畜と牧畜民がいなくなった草原に開発業者が進出してくる。例外なく漢人たちである。我が家の周辺にも陝西省や甘肅省、さらには北京や上海からの漢人たちが移ってきた。彼らはブルドーザーで草原を平らにしてから種子を播いた。巨大なスプリングラーが旋回して何億年もの前の地質時代に形成された地下水を吸い上げて振るまく。次の年には最後まで残って抵抗していたモンゴル人の井戸もついに干上がり、町への移住を余儀なくされる。西部大開発が進むオールドス高原の今日の実態である。

モンゴル人たちは遊牧こそが草原の良好な生態を守る唯一の有効な手段だと考える〔海2008: 146-156〕。これと正反対に農耕を至上の文明とみなす漢人たちは牧畜と遊牧を環境破壊の元凶だと認定してから、環境保護という大義名分で草原を畑に変えていく。牧畜という経済的な基盤を失ったモンゴル人たちは文化をも喪失して都市部で漢化の道を進み、貧困の一途をたどる。「家畜から離れた者はモンゴル人ではない」とみるモンゴル人に残された道は文化的な安楽死のみである、と現在の当事者たちは自己認識している。もはやモンゴル人たちを肉体的に再びジェノサイ

ドのギロチン台に追い上げる必要もない。自治どころか、「脱政治化」の「共治」という美名を掲げる必要もない。とくに漢人統治が隅々にまで確立された内モンゴル自治区にモンゴル人たちの声は歴史の彼方の遠吠えと化してしまったことを我が家の変遷が物語っている。

六 文化的ジェノサイドは 区域自治を通して実現す

周知のように、毛沢東をはじめとする中国共産党はかつて諸民族に対してその自決権の行使をみとめ、連邦制の確立を約束していた。政権獲得後には「帝国主義が民族問題を利用して中国の統一を離間しようとするのをどうしても防がなければならない」との理由で、自決権と連邦制はいつも簡単に一方的に棄却された〔毛里1998: 42〕。モンゴルの有識者たちは中国共産党に騙されたと認識している〔特木其格其2005: 10〕。冷静に近現代史を振り返ってみれば、少数民族の敵とされる「帝国主義」は一度も虐殺をはたらいたこともないし、開発という名のもとで蛮夷の地の環境を破壊した事実もないのではないか。逆に、諸民族を「ヨーロッパの中世よりも暗黒な奴隷制度から解放した」と自称する中国共産党は一九五八年にはチベット人に対して大量虐殺を發動し〔阿部2006: 333-338〕、マイケル・ダ

ナム 2006: 117-140、ステファヌほか 2006: 207-212、一九六〇年代にはさらにモンゴル人をジェノサイドの対象にし【楊 2009a; 2009b; 2009c; 2010】、一九七五年にはまた雲南省沙甸村のムスリムを集団虐殺した【馬萍 2006: 239-366】。少数民族側からすれば、中国による「解放」こそ、大量殺戮と環境破壊をもたらした唯一の原因であろう。

では、大量虐殺と環境破壊が実施されてきた少数民族地域における現状を、制度的に理論的にどのように位置付けて今後を考えるべきであろうか。長い歴史を有する中国の研究者は現在、「紀元前の秦の始皇帝の時代から諸民族に対して自治政策を推進してきた」と宣言している【劉 2009】。では、その「二千年の伝統を持つ自治制度Ⅱ区域自治」の本質はどこにあるのか。これからもし急激に「有史以来ずっと堅持してきた」自治を「脱政治化」して「共治」に舵を切るならば、区域制度が私たち蛮夷狄戎にもたらした進歩と利益を再清算しなければならぬだろう。そこで、私は最後に内モンゴル出身の二人の文化人類学者の見解を紹介することでひとつの理解の回路を整理してみたい。

中国国内の大学に勤めるナランビリクは「脱政治化」を謀ろうとする馬戎と「共治」を夢見る朱倫らに向かって正面から論陣を張った。ナランビリクは論じる。端的にいつて、いわゆる中華とは漢でしかない。五五の少数民族をも中華の範疇に組み込もうとするのも漢化を政治的に一層促

進させようとするためである。少数民族問題を考える上で脱政治化のポーズを馬戎と朱倫が掲げる最大の狙いは、諸民族本来の特徴を抹殺して同化Ⅱ漢化Ⅱ中華化を理論的にも政策的にも正当化しようとする政治的な企てである【Naran Bilik 2007: 23-24】。

想像の共同体たる中国において、モンゴル人たちはその母国からむりやりに分割されて漢人の国の一部にされてしまい、不本意ながらも「族」のひとつとして生きていかなければならなくなった【ibid. 28】。中国は、他国にも同胞たちが暮らす民族を意図的にその同一民族同士の仲間意識から切断するために、さまざまな政治的な細工を施してきた。例えば、キルギス（クルグス）人の場合だと、新疆ウイグル自治区に住む彼らを柯爾克孜（Kekelzi）と表現し、国境の向こう側のキルギスタン共和国の住民を吉爾吉斯（Jirjis）と呼ぶ。あたかも「柯爾克孜」と「吉爾吉斯」はまったく別々の民族のように故意にあつかって、分裂を促そうとする【ibid. 28-29】。国内外を峻別しているという議論もあろうが、「華人」を指すときに国内の漢人を華人とし、国外居住者を「花人」とするような努力はしていない。ナランビリクの分析によると、馬戎と朱倫の政治的な企図は少数民族の存在を物理的にも抹消して、新たにひとつの民族、漢化した中国国民Ⅱ中華民族を創出しようとした、歴史の書き換え運動である【ibid. 31】。

もう一人は現在イギリスの大学で教鞭をとるウラディン・ボラクの観点である。ボラクは次のように論じる。中国から脱出したモンゴル人やチベット人、それにウイグル人たちは口をそろえて北京当局はいま少数民族地域で肉体的・文化的ジェノサイドを推進している、と証言する。自らの故郷において、あとから入ってきた漢人たちに虐殺され、そして文化的な同化政策が強制されている、と彼らは主張する。二〇〇六年にチベット鉄道が開通してから文化的ジェノサイドが一層すすんでいると、インドに亡命しているダライ・ラマ法王も国際社会に訴えている事実は広く注目されている [Bulag 2010: 426-427]。

中国によって「解放」され、「幸せな大家庭」に暮らしているはずの諸民族がなぜ、北京当局の政策を文化的ジェノサイドと評するのだろうか。かれらの主張を客観的に理解するには、漢人政府が謳歌する民族区域自治政策を分析しなければならない。というのも、「民族区域自治政策でもって同化」文化的ジェノサイドがすすめられている」と少数民族側が強く訴えているからである [Ibid: 427]。例えば、内モンゴル自治区のテムチグチという人物は中国政府が二〇〇五年に公表した『中国的民族区域自治白皮書』を次のように分析している。「中国は少数民族の自治権をまったく尊重しておらず、諸民族間の平等性を否定している。(中略)モンゴル人に対してはまず自決権と連邦制を

みとめていたが、その後に撤回された事実から、モンゴル人は騙されてきたのである」と評している [特木其格其 2005: 1-21]。

ボラクの見解では、区域自治政策の最大の特徴は連邦制の否定にある。まず、民族区域自治政策は少数民族側が自発的にえらんだのではなく、いわゆる「民主集中制」にもとづいて中央政府から強制された制度で、その実権は漢人の書記の手中にある。次に、民族区域自治は民族自治と地域(区域)自治との結合体で、「区域」でもって「民族」を制御している。少数民族側が「大分散、小集中」の状態にあると事実には反した定義をして、少数民族を意図的に分散させている。その上で、国防上の理由から一貫して殖民を推進し、漢人が他人の故郷を占領し、他人の領土で多数派を占めるようになっていく。漢人が圧倒的に多数派を占めるという力関係の逆転により、一九六〇年代の文化大革命中にモンゴル人に対するジェノサイドが発生した。第三に、民族区域自治区でも社会主義近代化が導入されてきたというが、実態は少数民族が単なる労働力に転落し、社会の底辺で漢人に酷使されるに至っただけである。今日においても、いわゆる西部大開発は資源獲得に重点がおかれており、マイノリティの立場は考慮されていない [Bulag 2010: 437-441]。

「開発」と「発展」により、少数民族自治区は漢人たち

のロスモポリタニズムの対象となつてしまった。例えば、内モンゴル自治区では「撤盟設市」政策、つまり、清朝時代からつづいてきた盟 (ayimagh) や旗 (qoshghum) といった伝統的な行政組織を廃止して、進歩的とされる市制度が新たに導入された。一九八一年にはジョーウダ盟が廃止されて赤峰市に変身し、一九九九年にはジェリム盟が消されて代わりに通遼市が誕生した [ibid. 441-442]。発展のシンボルとされる市が確立されていくなかで、モンゴル語の地名 (市名) は漢人の書記たちに否定された。赤峰のモンゴル語名を用いた「ウラーンハダ市」や「ジェリム市」は成立せずに、モンゴル人の故郷に古くからあつたモンゴル語の固有名詞は「進歩的で、文明人の漢語」の地名に取って代われ、その地の先住民の色彩が消されていった [Bulag 2006: 56-81]。

モンゴル人の人類学者たちにいわせると、要するに中国は nation や nationality を政治的、領土的概念が付随する用語として理解し、それを打破するために「脱政治化」の「共治」理念で漢人の殖民を以前よりも増加させようとしている。政府の目論見もみごとに成功し、中華の殖民地に転落した民族自治区に定着した漢人たちもいまや「西藏人」や「新疆人」、あるいは「内蒙人」と自称するように変わった。あたかも漢人たちも少数民族地域の「土着」(indigenous) の住民のような顔を公然とするように変化し

ついでに [ibid. 442-442]。

少数民族側からみれば、民族区域自治という漢化＝同化政策の本質は文化的ジェノサイドである。歴史的につづいてきた中華化という文化的ジェノサイドはかつてないほどに成功し、中国は少数民族のあらゆる自立の可能性、あるいはそのように考えることすらも完全に否定した [ibid. 443]。

公平のために最後には漢族の文人らの言い分にも耳を傾けよう。二〇〇九年七月に新疆ウイグル自治区で「騒乱」が発生したことを受けて、南京大学の名誉教授にしてマカオ大学教授の汪応果は「中国にはひとつの民族しかない。それは中華民族のみである。(中略) 各級の民族自治政府をすべて撤廃して、真の族群間の平等を実現させ、分裂の芽を事前に摘もう」と主張する [汪 2009: 397-400]。資本主義の香港において「言論の自由」を守るために明鏡出版社を創設した何頻の主張も明快である。中国共産党は故意に多数の民族を創造し、いろいろな人たちに「民族衣装」を着せて、「民族の舞踊」を踊らせたのも所詮は「五十六の民族は五十六輪の花」が挿された花瓶のように国家を裝飾するためだった。「花瓶政策」＝自治区域政策は失敗で、一日も早く廃止しなければ民族問題は解決しない、と批判する [焦 2009: 533-536]。

このように、少数民族側は区域自治政策を同化＝文化的

ジェノサイドの実施だと指摘しているのに対し、漢族の知識人たちも民族問題と分裂主義を創出している有名無実の区域自治政策の廃止を求めている。民族自治政策の廃止こそ民族間平等の実現だとの論理である。おそらくその「平等」の実現は諸民族が完全に漢化＝中華化したあかつきの姿勢を夢想しているにちがいない。いずれにしても、現在、開発と発展という圧倒的な力で最後の完成、すなわちあらゆる民族の中華化＝文化的ジェノサイドの完成にむけて中国は突進しているのである。

注

- 〈1〉内モンゴル自治区のモンゴル人たちは自らを中国の「奴隷にすぎない」とみる[楊 2009a: 188]。二等市民とは私なりに中国を正当評価した表現である。
- 〈2〉中華の周辺の諸民族が漢人たちとまったく異なる歴史観を有しているという研究として、岡田 [1992] と梅棹 [1967] を参照した。
- 〈3〉中国の民族政策研究者たちは真剣に旧ソ連の民族政策を検討し、自国への波及を心配している。例えば、熊 [2010] がその典型である。
- 〈4〉内モンゴル自治区では計三九三四人が右派とされ、粛清された[楊 2009a: 81]。
- 〈5〉後述するように、殺害されたモンゴル人の数について

は別の説がある。

参考文献

- 阿部治平 2006 『もうひとつのチベット現代史——ブンスォク＝ワンギェルの夢と革命の生涯』明石書店。
- アラ騰徳力海 1999 『内蒙古控爾災難実録』私家版。
- アルタンデレヘイ 2008 『中国共産党によるモンゴル人ジェノサイド実録』(楊海英編訳) 静岡大学人文学部アジア研究プロジェクト。
- 梅棹忠夫 1967 『文明の生態史観』中央公論社。
- 王柯 2005 『多民族国家 中国』岩波書店。
- 汪応果 2009 『中国只有一个民族——中華民族』焦鬱塗『新疆之乱——没有結束的衝突』明鏡出版社。
- 岡田英弘 1992 『世界史の誕生』筑摩書房。
- 海山 2008 『遊牧消失は内蒙古草原生態悪化的根本原因』*Questions Mongolorum Disputae IV*, pp. 146-156.
- 郝維民 2005 「漫議中国西部大開發與蒙古族的發展——兼評少数民族群“去政治化”和“共治”」『蒙古史研究』第八輯、三八四—四二〇頁。
- 郝時遠 2004 「台湾的“族群”與“族群政治”析論」『中国社科学』二〇〇四年第二期、一二三—一三六頁。
- 志正 1993 「巴音希勒咏嘆調」本書編委会『難忘鄂爾多斯』南京大学出版社。
- 朱倫 2002 「論民族共治的理論基礎與基本原理」『民族研

- 究』二〇〇二年第二期、一一九頁。
- 朱倫 2003 『自治與共治——民族政治理論新思考』『民族研究』二〇〇三年第二期、一一一—一八頁。
- 焦鬱鑿『新疆之乱——没有結束的衝突』明鏡出版社、二〇〇九。
- ステファヌ・クルトワ、ジャン・ルイ・パネ、ジャン・ルイ・マルゴラン 2006 『共產主義黒書——犯罪・テロル・抑圧(コンソリテレン・アジア篇)』(高橋武智訳) 恵雅堂出版。
- 特古斯 1993 『浩劫過後的沈思』『内蒙古档案史料』一九九三年第四期、五二—五七頁。
- 特木其格其 2005 『関于《中国的民族区域自治白皮書》の意見和要求』私家版。
- ボルジギン・ブレンサイン 2003 『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房。
- マイケル・ダナム 2006 『中国はいかにチベットを侵略したか』(山際素男訳) 講談社。
- 馬戎 2004 『理解民族關係の新思路——少数民族問題的“去政治化”』『北京大學學報』(哲學社會科學版) 第四一卷第六期、一二二—一二三頁。
- 馬萍 2006 『皆殺しにされた雲南省の回教徒村——解放軍による沙甸の大量殺戮』宋永毅編『毛沢東の文革大虐殺——封印された現代中国の闇を検証』(松田州二訳) 原書房。
- 毛里和子 1998 『周縁からの中国——民族問題と国家』東京大學出版會。
- 楊海英 2001 『草原と馬とモンゴル人』日本放送出版協會。
- 楊海英 2009a 『墓標なき草原』上、岩波書店。
- 楊海英 2009b 『墓標なき草原』下、岩波書店。
- 楊海英 2009c 『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 I——滕海清將軍の講話を中心に』風響社。
- 楊海英 2010 『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 2——内モンゴル人民革命黨肅清事件』風響社。
- 熊坤新 2010 『蘇連民族問題理論與政策研究』中央民族大學。
- 劉広安 2009 『中国古代民族自治研究』中央民族大學出版社。
- 『初級中學課本試用本——内蒙古歷史』1988
- Bulag, Uradyn 2006 “Municipalization and Ethnopolitics in Inner Mongolia.” Ole Bruun and Li Narango eds., *Mongols from Country to City: Floating Boundaries, Pastoralism and City Life in the Mongol Lands*, China: NIAS, pp. 56–81.
- Bulag, Uradyn 2010 “Twentieth-Century China: Ethnic Assimilation and Intergroup Violence.” Donald Bloxham and A. Dirk Moses eds., *The Oxford Handbook of Genocide Studies*, New York: Oxford University Press, pp. 426–443.
- Naran Bilik 2007 “Names Have Memories: History, Semantic Identity and Conflict in Mongolian and Chinese Language Use.” *Inner Asia* 9, pp. 23–39.
- Sirajbamsu, Gha 2006 *Sirajbamsu-yin Jekiyul-un Sungghunul*. A Private edition.